

研究ノート

腕時計のジオポリティクス

Geopolitics of Wristwatch

並木 浩一

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

(2020年9月12日 受理)

I. 「時計の国スイス」「時計の街ジュネーヴ」の検討

本稿は「時計の国スイス」「時計の街ジュネーヴ」というイメージの源泉を、地政学的視点を軸に宗教・歴史・政治的な経緯を踏まえ、探っていく試みである。

腕時計をつくる国と問われて、真っ先にスイスを思い浮かべる人間は少なくないだろう。さらに街レベルにまで落とし込むと、スイス第2の都市ジュネーヴの名前がまず挙がることは確実だ。もっとも世界経済のレベルで見れば、実は販売数量では日本が圧倒的に優っているのであるが、日本を時計の国と捉える認識は、例えば自動車などと対比しても一般的ではない。産業構造の問題でもあるが、グローバルに共有されるイメージは強固である。

腕時計のことを抜きにしても、スイスと聞いて多くのひとが思い浮かべるイメージは、アルプスの山々、チーズとチョコレートといったステレオタイプに向きやすい。のどかで平和な永世中立国という認識に、それが重なってくる。しかしながら一方でスイスは、腕時計とともに付加価値の高い薬品と機械製品の生産・輸出で潤っているものであり、品質の

高い武器の生産には定評がある。さらには事実上の徴兵制を守る、欧州でも数少ない国である。

「スイスは成人男性に兵役義務を課す、欧州では数少ない国の1つだ。フランス、ドイツ、イタリアなどは同制度を廃止している。1996年から、兵役の代わりに社会奉仕ができるようになったが、それより以前は何千人もの男性が兵役拒否を理由に刑務所へ送られた」(「スイスの兵役義務、拒否できる?」, <https://www.swissinfo.ch/jpn/>, SWI swissinfo.ch, スイス公共放送協会 SBC 国際部, 2020年9月7日情報取得)

なによりスイス自体が、よく誤解されるように非武装ではなく、自前の高品質な武器を装備する「武装中立国」である。これは一例であるが、少なからずスイスの印象は、善意に誤解されていることがすくなくない。それは受容する側の問題だけではなく、スイスがそうした情報の受容を是認もしくは否定せず、時にはミステフィケーションに疑われるような行動をとってきたこと、つまりは良いイメージ形成に努めてきたことの結果でもある

だろう。それがスイスの腕時計、またはジュネーヴの腕時計に反映されるイメージでもある。腕時計はその成り立ちから、戦時には欠かせないツールであり、信頼が必要とされる精密機器であった。伝承される腕時計の誕生物語の有力な一つが、ボーア戦争に従軍した将校が、懐中時計を革紐で手首にくくりつけたというものであるのも、事実はどうあれ無理がない。スイスの時計は、懐中時計の時代から信頼のシンボルであった。

一方で腕時計には、奢侈品としての側面がある。狭義の「ジュネーヴ時計」はむしろこちらの性格が強い。盤石のステータスを持つフランスのブランドであるルイ・ヴィトンでさえ、自身の腕時計を生産する場所としてスイスを選び、2014年の自社時計製造アトリエの拡大・移転先として最終的にはジュネーヴに落ち着いたことも、その現れである。

「2014年の工場移転は、ジュネーヴ・シールを見据えての戦略的選択であった。ラ・ショード・フォンに所在しては、ジュネーヴ・シールは取得できないことを念頭におくと、この選択は、新規参入ブランドの最高峰の認証へのシグナルであり、本格的な決意を示したといえよう。工場移転が示したのは、高級時計ブランドとして、その技術的証明とステータスを確立するために権威のある認証を得る、という業界における規範的な行動とも言える」（『仏系多国籍企業の産業クラスター活用プロセス—ルイ・ヴィトンを事例にして』、野口麗奈、日仏経営学会誌、37(0)、p.40、日仏経営学会、2020）

スイス、そしてジュネーヴが持つ「そこで腕時計が作られる理由」と必然を、次項から詳述する。

II. ジュネーヴと腕時計——カルヴァンとユグノーの街で

スイスには4つの公用語があるが、著名な時計ブランドは、ドイツ語圏のシャフハウゼンという例外を除き、ほぼフランス語が話されている地域に集中している。オーデマ・ピゲやジャガー・ルクルトなどの高級時計ブランドで有名なジュー・渓谷は道一本でフランスと繋がっている。スイスまで毎朝国境を越えて出勤してくるフランス人も、実は珍しくない。その道をフランス側に60キロ進めば、ブザンソンの街に至る。フランスを代表する時計造りの街であり、ブザンソン天文台ではクロノメーター検定も行っている。つまりは、ジュネーヴからバーゼルに至るスイス南西部とそのさらに西側のフランスは、時計を通じて繋がっていると言っても過言ではない。

そのゾーンの中で、レマン湖を望むスイスの国際都市ジュネーヴは、腕時計のひとつの聖地である。その理由は、この街がフランス語圏スイスの時計産業の中心地であることに加え、今日ではS.I.H.H.、日本ではジュネーヴ・サロンの名前で知られる見本市の開催地であることも大きい。ジュネーヴ空港に隣接する見本市会場パレクスポで開かれ、正式名称はS.I.H.H. = サロン・アンテルナシオナル・ド・ラ・オート・オルロージュリ。直訳すれば、『高級時計国際サロン』ということになる、世界最高峰の時計見本市であると宣言しているということになる。

ジュネーヴが時計の街になったことの背景として、見逃すことのできない背景が、この街が経てきた特殊な宗教事情である。いうまでもなくジュネーヴは、いつときジャン・カルヴァンが治めたプロテスタントの街であり、宗教改革のまさに現場である。それが、ジュネーヴを時計の街にするのに欠かせない事情であった。

もっとも現在、スイスの産業として一番イメージしやすいのは「観光」ということにな

るだろう。首都ベルンはさほどでもないが、サンモリッツのスキー、古都ルツェルンなどは、のどかな佳き国のイメージを代表する表象である。そしてチューリヒ、ジュネーヴという二大国際都市は人気の旅行先でもある。

いっぽうでスイスは、非常に現代的な産業の国でもある。プライベート・バンクに代表される、世界の富が集まる金融のセンターであり、製薬・化学薬品工業の中心である。そしてその中でも、歴史的な産業として知られるのが時計を中心とした精密機械工業だ。その背景としてはまず、歴史的であると同時に、地理的な問題が指摘されてきた。

1つには、冬季には雪に閉ざされる地域が多いスイスでは、冬になるとフランスやイギリスなど海外向けに、時計の部品を造るという「内職」が盛んに行なわれていた点である。つまり、人的資源とノウハウが蓄積されていた。次に、隣国フランスでの新教徒（ユグノー）弾圧のために、時計造りの技術者や多くの商工業者がスイス、特に宗教的指導者であるカルヴァンのいたジュネーヴに亡命し、腕時計メーカーに育つ資本家が誕生してきたことだ。海外の下請けではなく、スイス国内で最終製品にまで仕上げられる基盤が育った。ジュネーヴにはもともと地場産業であるエナメル細工の伝統があり、これらが結びついて、華麗なエナメル細工を施した美的で高性能の「ジュネーヴ時計」を生み出した。

そしてジュネーヴの機械式時計が目立つようになると、やはり時計の部品を造ってきたジュウ渓谷やトラヴェール渓谷、ビエンヌなどスイスの他の地域でも本格的な時計が造られるようになった。ここまでが、一般に語られるスイスとジュネーヴの時計産業史の端緒である。

では、それがなぜユグノーであったのか。なぜユグノーが、腕時計産業の起爆剤となりえたについての問題を考えてみよう。この点についてはマックス・ウェーバーの論考が参考になる。すなわちウェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の中

で考察した問題、とくにカルヴァンが唱えた「予定説」との関連である。

歴史が伝える通り、ルターと並ぶ宗教改革の旗手ジャン・カルヴァンは1536年に初めてジュネーヴに滞在し、1553年にはこの街で事実上の神政政治を確立した。その中で実践され、事実上強制されたのは、徹底した世俗的禁欲と、もう一つは勤労である。ウェーバーはこの点を「合理的なキリスト教的禁欲と生活方法論を修道院から世俗の職業生活のなかにもち込んだ」と表現しているのであるが、それはあらかじめ救済される人間は決定しているというカルヴァンの予定説を、そのままジュネーヴという街で行われた社会的実験におきかえたものであった。それは『組織的な「世俗の職業労働」を、最高の「禁欲の手段」として、しかも同時に、再生者とかれの信仰の真正さの「もっとも確実でもっとも明白な証明」として宗教的に評価すること』（『ウェーバーの宗教観——「近代の経済エートス」の形成——』、岡澤憲一郎、『名古屋学院大学論集 社会科学篇』51巻3号、p.43, 2015）にほかならなかった。

ここで指摘しておきたいのは、時計作りという労働が、傍目で見ているよりははるかに負荷の高い労働であるという点である。力仕事ではないものの、ミリ単位の部品を組み立てていく作業を一日中続けていくことは、非常な集中力を必要とし、精神と眼精を酷使する。ジュネーヴの時計職人を指す言葉として「キャピノティエ *cabinotier*」という単語があるが、これは常時太陽光が入る最上階の工房 *cabine* を仕事場とするところからきている。視力だけでなく、明るい自然光がなければ成立しない仕事であり、職人たちはみな窓に向かってワーキングベンチをおき、しかも自分の肩の高さまで作業面をあげて、目の前でミクロの部品を扱うのである。

その仕事を、キャピノティエたちは進んで受け入れた。禁欲と表裏一体の勤労は、神に選ばれているはずの自分という「予定」を確認する方法であった。しかも彼らはその勤労

の代償を、現世的な意味でも受け取っていた。カルヴァンはもちろん貪欲な金儲けを否定したが、その教義は『「目的としての富の追求」は拒否しながらも、「職業労働の成果としての富の獲得」は「神の祝福」とみなしていた』（岡澤, p.34）のである。

それはどこでも起き得たことではない。ウェーバーのことを全て肯定していたとしても、それがなぜジュネーヴであるか、という問題が残る。たとえば、同じように弾圧された新教徒が逃げ込んだオランダでは、なぜなかったのか。それについては次項で述べる。

Ⅲ. ジュネーヴの地理的・歴史的条件

現在の、スイスのなかにおけるジュネーヴの位置は、それだけでも多少奇異にみえるところがある。スイスからフランスにまるで角を突き出したような都市であり、街のシンボルであるレマン湖は対岸でフランスに接している。フランスと国境を接するフランス語圏の隣国という立ち位置は、紆余曲折の賜物である。

そもそもジュネーヴは、スイスではなかった。16世紀、来るべきカルヴァンの登場により激動する町は、サヴォワ公国領である。その立場から独立したのが1936年のことだ。それはスイスの首都の前身である帝国自由都市ベルンが、ジュネーヴと接する現在のヴォー州一帯を勢力下におさめたことによる。ベルンはツヴィングリがはじめたスイスの宗教改革の影響下にあり、スイスにおけるカトリック派と宗教改革派の争いの先頭に立っていた。1529年の第一次カッペル戦争では、プロテスタントによるキリスト教都市同盟の中心となり、カトリック勢力と戦った。その有力都市国家の後ろ盾を得て、ヴォーのその先にある辺境地にすぎないジュネーヴは都市国家として成立することができ、E.W. モンター（『カルヴァン時代のジュネーヴ』著者）の言い方を借りれば「組織をもつプロテスタ

ンティズムの南西部」で宗教改革を加速したのである。これがスイスの側からみた、「時計都市ジュネーヴ」の成立の前史である。

いっぽう、ジュネーヴを時計の街に変える加速力の源泉であるユグノーは、フランス側からみた時計の街の歴史をつくる要因に他ならない。モンターは1550年から1562年の間、少なくとも7000人の移住者をジュネーヴが受け入れたと推測している。カルヴァンが死去する1564年までのあいだ、フランスの新教徒にとってのジュネーヴは、すぐ隣にある約束の地であった。1562年に始まったフランス内でのカトリック対プロテスタントの争い（ユグノー戦争）は断続的に勃発した。小康状態が訪れたのは、1598年にナントの勅令が発せられ、プロテスタントの信仰の自由が認められてからのことである。

そのナントの勅令を廃する「フォンテーヌブローの勅令」にルイ14世が署名したのは1685年のことだ。しかし、1世紀に近い平和のなかで、フランスの新教徒たちはただ停滞していたのではなかった。富裕な商工業者、熟練した技術者たちを多く含む中産階級のユグノーが、国境を超えた。その有力な行き先が、ジュネーヴである。先立つ1648年、欧州内でカトリック対プロテスタントの争いに一定の終止符を打ったヴェストファーレン条約により、スイスは神聖ローマ帝国から離脱し、独立していた。国境を超え、ジュネーヴ共和国に入りさえすれば、その先はすべてプロテスタントの地であった。

時計産業の歴史から見てみると、この時期からジュネーヴ、またスイスの時計産業は急速に隆盛していく。都市国家ジュネーヴを中心に、後背地であるジュラ山脈のラ・ショー・ド・フォン、ジュー溪谷、トラヴェール溪谷の町々に、有力な時計産業が点在していく、スイス時計産業の大きな特徴である分業が機能し始めたのである。ジュネーヴはその後、ナポレオン時代のフランスによる併合を経るも、1815年にウィーン会議でスイス連邦が独立と永世中立国としての承認を得る際

に、正式にその一員となる。時計の街ジュネーヴと時計の国スイスは、初めて重なったのである。

「スイスの時計産業は、都市部から離れたジュラ山脈の山間部に立地している。1880年時点では、ジュラ地方の時計工業の最大の拠点は人口24万人のラ＝ショ＝ド＝フォンと16万人のビールの二つの都市であるが、しかしこの二つの都市への集中度はそれほど高くなく、周辺の数十の村落にも時計部品の工房が分散的に立地している。時計産業は、製造工程の一部分だけを担う何百もの小規模な生産単位に分かれていた」（『スイス時計産業の展開 1920-1970年——産業集積と技術移転防止カルテル——』、ビエール＝イブ・ドンゼ、「経営史学」第44巻第4号、p.4、経営史学会、2010）

前項で述べた通り、スイスの中でも世界に通用する腕時計を生産する地域はそう広くはない。ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の4か国語を公用語とする他言語国家のスイスで、高級腕時計の産地はフランス語圏に集中する。州でありコミューンでもあるジュネーヴ、ジュー渓谷やローザンヌを含むヴォー州、ラ・ショー＝ド＝フォンやル・ロークルなどのジュラ山脈の街やトラヴェール渓谷を抱えるヌーシャテル州がその代表だ。

ヴィルレやビエンヌは、フランス語圏でもドイツ語圏でもあるベルン州に属し、完全なドイツ語圏ではシャフハウゼンを州都とする同名の州の名が挙がる。これらの地の個性的な産物＝腕時計の評価の総体が、スイス時計の名声を支えているのである。簡単に概略を述べると以下ようになる。

ジュラ山脈 MASSIF DE JURA はジュラ紀の語源でもあるスイス西部の、全長約250kmにわたる山間部。ジュラ、ベルン、ヌーシャテル州にまたがり、高級時計製造で

知られる街が点在する。ル・ロークル、サン・ティミエ、ヴィルレなどの名が有名。ラ・ショー＝ド＝フォンにあるスイス最大の時計博物館を併設する「人類と時間」研究所は、スイス時計研究の中心的存在である。トラヴェール渓谷 VAL-DE-TRAVERS はヌーシャテル州、ジュラ山脈のほぼ南端部に位置する。時計製造で特に有名なコミューンはラ・コート＝オ＝フェとフルーリエ等。時計製造に加えて高級ムーブメント作りでも有名。エルメスにムーブメントを提供するヴォーシェ社もこの地にある。ビール／ビエンヌ BIEL/BIENNE は首都があるベルン州に属し、ドイツ語圏とフランス語圏の境目にある都市。正式名称は独仏併記となる。人口でスイス10番目のコミューンであり、地の利もよく、またバイリンガルの街であり、時計産業と関連のビジネスが盛ん。多数の腕時計ブランドやムーブメント、部品メーカーを擁するスウォッチグループの本部もこの地にある。ジュー渓谷 VALLEE DE JOUX は高級時計・複雑時計の故郷的な地域。ジュラ山脈のほぼ最南端であり、ローザンヌを州都とするヴォー州の最北端。ジュー湖を取り囲む17のコミューンからなる一帯で、人口約6100人のどこかで桃源郷的な立地になる。2008年から行政上では『ジュラ・ノール・ヴォードワ』が呼び名となったが、住民は単に「ヴァレー」と呼ぶ。

こうしたスイスの中であって、いまでも新しい時計ブランドは、ジュネーヴで創業したいと願うことを指摘しておきたい。それは偉大な成功体験の先例があるからで、ウォッチメーカーにとって、ジュネーヴは世界のメインアリーナなのである。新興ウォッチメーカーには、歴史がない。つまり創業年は変えようがないが、創業地は選ぶことができる。ジュネーヴは、100年後の後継者たちが創業者に感謝する地なのである。

さらにプラグマティックな理由＝資金と人材の問題もある。世界的な金融大国スイスには、ITや資源他様々な理由から生み出され

た富が集積し、通過していく。そしてその資本は常に投資先を探している。いっぽう孵化を待つ卵のような新興腕時計ブランドには、投資が必要だ。そんなウォッチメーカー＝ベンチャーと、個人・機関を問わず投資家との出会いに、ジュネーヴは相応しい。創業地がジュネーヴであるということは、重要な安心材料なのである。

そして人材。前述した通り、周りをほぼフランスに囲まれている特殊な立地が、絶好なのである。フランスに比べてスイスは物価も高いが、賃金もはるかに高い。ジュネーヴでは高度な教育、高い技術を持つフランス人もまた、働き手としてあてにできる。事実、ジュネーヴ駅に着く鉄道や公共バスの数路線は、フランス内に越境しており、毎朝通勤客を運ぶ。いっぽうスイス人の時計技術者がジュネーヴに集まっていることはいうまでもない。

IV. 政治 スイスが時計の国であるために

スイスとジュネーヴの時計が世界を席卷した理由として見逃すことができないのは、前項でも述べた「永世中立国」という立場の問題である。1815年のウィーン会議以来今日に到るまで、スイスはその立場を退いたことは一切ない。

まず非常に単純化した理屈で言えば、中立国はいかなる国に対しても交易が可能である。交戦状態にある国のどちらにも、物資を輸出することができるし、ビジネス上の関係を持つことが可能なのである。ここにスイスの、中立国としてのビジネスモデルが見える。再度の確認であるが、スイスはプライベート・バンキングの存在に象徴される、金融システムの深奥部である。また産業として、武器を含む機械、薬品、時計産業が発達しており、その質の高さから、高付加価値商品としての販売が可能である。すなわち、平時と戦時を問わず、戦費の調達から戦略物資に至るまで、

受注の準備ができる国がスイスなのである。

そして時計は、重要な軍隊の装備品である。現在に至るまで各国の軍隊は「制式品」として腕時計を支給することが珍しくない。それは空軍の操縦士に支給されるナビゲーター・ウォッチであり、砲兵のためのクロノグラフ（ストップウォッチ、もしくはその機能を持つ時計）であった。そして圧倒的な量の安価なミリタリー・ウォッチが、下級兵士レベルにも支給された。作戦行動においては、全員が同じタイムスケジュールで動くことが必要であり、そのために正確で均質な時計を総員が持つ必要がある。しかもそれは丈夫で、ある程度安価に大量生産されなければならない。そうした生産能力を持たない国は、どこからか調達を試みることになる。それがどういう国であるかを問わずに、ハイレベルな「ミリタリー・スペック」の時計を調達可能な国は、スイスをおいて他にはないのである。

19世紀においてスイスの時計造りの信頼性はよく知られるようになったが、まだ世界一といえる状況には至っていない。時計造りの先進国であるイギリス、フランス、そして新興の大国アメリカと並び立つ存在であったというのが、むしろ実態に合っているだろう。それが20世紀初頭では、スイスはアメリカと肩を並べる時計の生産国となり、追い越す体制を整える。「スイスの時計生産量は、第一次大戦まで安定的に増加し、輸出個数も1885年の290万個から1914年の1000万個に増加した」（ドンゼ、p.4）。

決定的に状況を変化させたきっかけは第二次世界大戦である。アメリカなど戦争当事国の産業は軍事用にシフトし、高級時計の生産は手薄になる。奢侈品も軍用品も、時計そのものの需要は逼迫した。そのなかで中立国スイスは連合国・枢軸国を問わず、軍用時計の大量輸出が可能な存在であった。第二次世界大戦は、スイスの時計産業にとって特需であったのである。また、空洞化した戦争当事国の国内市場にも、スイス時計は浸透していく。第二次世界大戦終結以降、スイス腕時計は

質・量とも、世界一の位置を確保した。

もっとも、その間には紆余曲折が存在する。実際はヨーロッパ戦線の終結まで、スイスは枢軸国に常に脅かされていた。永世中立国とはいえ、同じく中立国であるベルギーは早々とナチス・ドイツが全土を占領した。そのドイツが同盟国イタリアとの間のスイスを欲しがるのは明らかだった。スイスを守ったのは、指導者アンリ・ギザンである。

『ナチス・ドイツが欧州で侵攻を進める中、中立国スイスはゴッタルドを中心に「貝のように」閉じこもり、身構えた。軍の最高司令官となったギザン将軍は、アルプス地域、特にゴッタルドの要塞を中心とした防衛計画「国家要塞」を採用してスイスを守った』（『スイスの要塞としてのゴッタルド』, SWI swissinfo, <https://www.swissinfo.ch>, 2020年9月7日情報取得）

ここで「国家要塞」と名指されているのは、英語圏の軍事史で「レドゥイット・プラン」と呼ばれているものだ。ギザンはスイス軍の最高司令官として民兵40万人以上を動員し、国中に防衛線を張り巡らせた。その中心であり、象徴的な場所が、ドイツ語圏スイスとイタリアを結ぶ天然の險地ゴッタルド（ゴットハルト）である。ギザンはナチス・ドイツを牽制した。それは「侵攻を受けて占領が避けられなくなるときにはアルプス山脈を縦断するザンクト・ゴットハルト、シンプロンの両トンネルを自爆させるという予告」（『中立国の戦い——スイス、スウェーデン、スペインの苦難の道標』, p.120, 飯山幸伸, 光人社, 2014）であった。ドイツがスイスを欲しがると最大の理由を焦土化、無力化すると逆の脅しをかけたのである。ギザンは、その永世中立国はまた中世以来の傭兵の伝統を持ち、現在まで続く徴兵制を維持する非常に厄介な“重武装中立国”であることを思い出させ、抑止力を高めたのである。「中世のスイスは中立や平和主義とは逆の立場にあり、数百年もの

間、外国軍に傭兵を派遣してきた。その数は100万人を超える。スイスほど傭兵を派遣した国はほかにない。スイスが攻撃された場合はスイス軍が外国から呼び戻されることになっていたため、スイス傭兵を雇う戦争当事国はスイスを攻撃しようとは思わなかった」（SWI, 前掲）

結果的にスイスは侵略を許さなかった。しかもドイツは腕時計の重要な販売先であり、イタリア、そして占領下のフランスも重要な販路であった。いっぽう連合国に対しても時計の輸出は続いたのである。

V. まとめ

今日のスイス時計、ジュネーヴ時計の隆盛は宗教的背景、国体の変遷を含む特異な歴史、永世中立国という特殊な立場の背景なしには語れない。しかもそうした国がドイツ・イタリア・フランスに囲まれ、しかもそれらの国の往来を阻害するアルプスを全て抱えていたこととは深い関係がある。いっぽう、そうした国の辺境地であるジュネーヴが、今日の国際都市としての繁栄とともに、世界一の時計作りの街として認められていることもまた事実である。様々な要素を絡めとる地政学は、この国とこの都市に、時計というひとつの像を重ねたことになる。

なお、第二次世界大戦後のスイス時計・ジュネーヴ時計は、新興国日本の猛追を受けてみぎわまで追いつめられ、しかもそこから復活する物語を経て現在に至っている。その点については、別稿にて考察の機会を持ちたい。

【引用文献】

- ドンゼ, ピエール＝イブ, 「スイス時計産業の展開 1920-1970 年——産業集積と技術移転防止カルテル——」, 「経営史学」第44巻第4号, 経営史学会, 2010
飯山幸伸, 『中立国の戦い——スイス、スウェ

ーデン、スペインの苦難の道標』光人社、
2014

野口麗奈, 「仏系多国籍企業の産業クラスター
活用プロセス——ルイ・ヴィトンを事例に
して——」, 日仏経営学会誌, 37(0), 日仏
経営学会, 2020

岡澤憲一郎, 『ウェーバーの宗教観——「近代
の経済エートス」の形成——』, 『名古屋学
院大学論集 社会科学篇』51巻3号,
2015

SWI swissinfo.ch スイス公共放送協会 SBC 国
際部, 「スイスの兵役義務、拒否できる?」,
<https://www.swissinfo.ch/jpn/>, 2020年9
月7日情報取得
「スイスの要塞としてのゴッタルド」, 2020
年9月7日情報取得